

## I -2 メディア・情報行動1 (心理・受容)

物語アプローチから見た反原発運動とインターネット：Misao Redwolfと  
いう「傷ついた物語の語り手」An Analysis of Anti-Nuke Activism and the Internet Based on  
Narrative Approach : Misao Redwolf as a “wounded story teller”田村 貴紀<sup>1</sup>

Takanori TAMURA

<sup>1</sup>法政大学キャリアデザイン学部 Hosei University

**Abstract** This paper analyses Twitter messages of a leading anti-nuke activist, Misao Redwolf, from a perspective of narrative approach. Based on text mining analysis of the messages, the author found her personal narrative was connected to anti-nuke protest as public issue. This scheme is sharable by the protest participants who also have reasons to participate in the action in their personal experiences and self-narratives.

**キーワード** 社会運動、反原発抗議、インターネット、物語アプローチ

## 1. はじめに

## (1) 反原発運動とインターネット

本発表では、反原発運動とインターネットの関係性について、物語アプローチによって分析する。

発表者は2012年6月29日から、ほぼ毎週行われる金曜日の官邸前抗議に定期的に参加して参与観察を行い、また2012年8月から首都圏反原発連合の主催者や一般参加者にインタビューを行ってきた。しかし、3・11以後の反原発運動は、その運動の途上にあり総合的な評価を下すことは難しい。また直接的にそれを対象とした先行研究が少なく仮説を検証するという形で立論することが難しい。

そこでこの発表では、首都圏版原発連合反原発年後の中心的人物であるMisao Redwolf（ペンネーム、以下Misao）のツイッターテキストをコンピュータ・コーディング（テキスト・マイニング）によって分析し、反原発運動とインターネットの関係について探索的な考察を行いたい。

## (2) インターネットと社会運動—首都圏反原発連合

東日本大震災による福島第一原発事故は、原発に反対する大きな市民運動を引き起こした。運動は全国的に展開され、様々な団体が脱原発の意思を表明している。その一つに「官邸前抗議」と呼ばれるものがある。野田内閣によって決断された大飯原発再稼働に反対して、首相官邸前では毎週金曜日に大規模かつ連続的な抗議行動が行われるようになった。「官邸前抗議」は、2012年3月に始まり（野間 2012）、2013年6月14日で58回<sup>1</sup>を数えている。この「官邸前抗議」は、13の反原発団体の連合体である「首都圏反原発連合」（以下反原発連）によって主催されている。

原則的に歩道上で行われる抗議活動であるが、2012

年6月～7月には、歩道に収まりきれなくなった多数の参加者が自然発生的に車道に溢れだし、官邸前を埋め尽くす事態となった。2012年7月31日には議員会館にて反原発連有志と脱原発をめざす国会議員との対話のテーブルが設けられ、8月22日には首相官邸においてMisaoなど反原発連有志10人が当時の野田首相と面会し、要求を伝えた。その後2012年秋以降は、警察による警備強化もあり、官邸前抗議で群集が路上にあふれ出すことはなくなった。しかし、2012年11月11日、2013年6月2日に、反原発連は国会議事堂を包囲する大規模な集会を開催している。

90年代以降の抗議活動は、60年代のそれと比較して平和なお祭りのような「祝祭性」（五野井 2012:8）が指摘され、言わば文化現象として理解される部分もあった。しかしここに及んで抗議活動は、明白に政治の次元のもんだいとして浮上したのである。この点で反原発連は、戦後の社会運動の変化を考える上で重要な対象である。

更に社会運動のインターネット利用という観点からも、注目すべき存在である。

五野井（五野井 2012）は、インターネットの発展による社会運動の「クラウド化」を指摘する。それは「ウェブを介して容易に情報にアクセス可能になることで、小規模のコストと手間て情報を共時的にシェアし並列化でき、象徴的なインフォメーション・センター以外に、特定の本部や拠点を必要としない。フォーマットはもちろんプラカードなどのツールもダウンロードできるし、ミーティングポイント、デモコースも把握可能」（五野井 2012:15）になることである。

これは反原発連にも当てはまる。活動の動員宣伝にインターネットを多用し、プラカードのデザインをコンビニエンスストアのネットプリント経由で配布している。参加者はネットで情報を得て参加するので、顔見知りになっても本名を知らない事はよくあることである。また、反原発連は13の反原発団体からなる連合体であり、政党やNPOのような制度的集団ではない。執

<sup>1</sup> 反原発連プレスリリース 2013. 6. 14

## I -2 メディア・情報行動1 (心理・受容)

行員会なども存在せず、Misaoは、制度的には代表者ではない。さらに、生業を放棄して献身している参加者はいるものの、固定した事務所や有給雇用された専従職員もいない。この点では、「社会運動のクラウド化」の典型的な事例である。

そうではあるが、「社会運動のクラウド化」だけでは説明できない観点が二つある。ひとつは、ソーシャルメディアによる情報拡散の限界である。社会運動におけるソーシャルメディアの役割は、情報拡散による運動への動員を中心に論じられてきた (Costanza-Chock 2011, 藤山 2012, Tufekci & Wilson 2012, Wilson & Dunn 2011)。それは資源動員論のソーシャルメディア利用への応用ともいえるものだろう (Eltantawy & Wiest 2011)。しかし、そこに過度の強調があったことも指摘されている (伊藤 2012:92)。官邸前抗議の主催者へのインタビューなどからも、ソーシャルメディアによる情報拡散、動員には一定の限界があると実感されていることが分かる (小熊 2013:322)。そのため反原連は、抗議行動、インターネットによってもなお到達できない大多数の国民に対して告知するための方法として、No Nukes Magazineという小冊子を大規模に配布し始めた。

もうひとつはハブになる人材の代替不可能性である。特定の本部や拠点は必要としなくても、ハブとなる人材には、依然として責任・献身・戦略立案能力が要求される。官邸前抗議で度々車道にあふれる程の群衆が集合した際に、無事故で抗議を終了した運営力や、6月2日の原水禁系の「さようなら原発1000万人アクション」と原水協系の「原発をなくす全国連絡会」、反原連の3団体共同行動を実現する政治力は、ICT技術のみによって成立するものではないのである。

### (3)社会運動への物語アプローチとインターネット

これらの点を勘案すると、反原連の中心人物であるMisaoの活動に注目し、インターネットの利用について、単なる情報拡散の視点からのみでなく、「社会運動論への物語アプローチ」を用いた内容分析によって接近することには、インターネットと社会運動という近年の社会情報学的課題の解明に寄与するものだと考えられる。

以下、「社会運動論への物語アプローチ」について簡略に紹介する。「社会運動論への物語アプローチ」は、個人や集団の持っている物語が、運動参加・継続の動機や集団の結束を維持する力になっていると考える立場である。

社会運動論では1970年代後半以降「資源運動論」が影響力を持った。これは、利用可能な資源(金銭、人員、ネットワーク)が存在するかどうか、あるいはどう資源を獲得するのかという点に注目する。だが、資源動員論は、参加者を理性的なアクターとしてのみとらえ、集合行動の文化的、象徴的な過程をとらえることに成功していないという批判が起き、フレーミング理論が登場した (Davis ed. 2002:6)。ところがデビス (Davis ed. 2002) は、フレーミング理論は、「運動」の内的で文化的ダイナミズムに注目するも

の、論理的な説得や信念の一致に強調点をおきすぎたと批判する。したがって、運動内での個人の関心の醸成や共同性が、どのように構築されていくのかというプロセスを説明できない弱さがあると指摘する。そして、それは物語アプローチを導入することで克服できると考える (Davis ed. 2002:9-10)。

物語は二種類の集団を含む。それは語り手と聞き手である。そしてうまく語られた物語は、両者を関係づける。この点で物語りは意味を共有することに力を持つ。従って集団の物語を研究することは、社会運動の出現、資源の動員、ひとびとへの説得を解明することに役立つ。「参加」は、同意以上の事柄で、参加者が参加しリスクを取り行動するためには、「感動」することが必要なのである。参加する、巻き込まれることは、論理的で目的遂行的なだけではなく、イメージネーションや直感、そして感情が絡んだことである (Davis ed. 2002:16-24)。

さらに、Benford (Davis ed. 2002) は、運動の物語には、二種類あるという。参加者が自らについて語る「参加者の物語」と、運動自体や運動が目指す世界に関する「運動の物語」である。「参加者の物語」では、人々は自らについて語り、自己語りをつうじて自らの経験と自我に意味を付与する。「運動の物語」は主に指導者によって語られ、運動全体の方向を示し、周辺の参加者の「参加の物語」と相まって、集合的なアイデンティティを固くする。

しかし、「運動の物語」は、参加者を制御し、抑圧する力となることがある。一握りの代表者の存在や、運動内の禁止事項、運動体の規範を侵した参加者への他の参加者からの罰則的冷遇などの存在である。(Davis ed. 2002:53,66)。つまり、運動の正しさを決める物語を、運動自身が持つことである。70年代の新左翼運動が陥った隘路を、思い起こすこともできるだろう。

## 2. 対象と方法

### (1) Misao Redwolf

本発表の分析対象はMisao Redwolfのツイッターテキストである。「Misao Redwolf」は、イラストレーターとしての名前、ペンネームである。本名、年齢は非公開。

Misaoはファッションデザイナーとしてスタートしたが、成功の途中で1990年米国に渡り、様々な経験をする。この時の決断に対してMisaoは、「デザイナーとして成功しかけたが、その業界の人々の生き方と、自分の望む生き方が違うと感じた」と述べている<sup>2</sup>。この生き方を求める求道的な姿勢は、その後のMisaoの活動を一貫している。

帰国後1999年からイラストレーターとして活動していたが、2007年から反原発運動を開始する。この頃始めていた職業上の大きなプロジェクトを中断することになり、反原発運動に専念し始める。現世的な成功を二度放棄した事になる。反原発団体NO NUKES MORE

<sup>2</sup> インタビュー 2012.9.4

## I -2 メディア・情報行動1 (心理・受容)

HEARTSを主宰するようになり、2011年9月反原発を結成する。現在も反原発運動に専念する生活である。生業を中断していることについてMisaoは、「身体が弱いので運動と両立できないから」と説明している<sup>3</sup>。

Misaoの信念の中心は、2006年ごろ瞑想中に受けた啓示にある。「私は所詮使われている身、神の道具だ」とMisaoは言う。しかし、Misaoは対外的にそのことを語らない。「非合理的」と一般的に理解される可能性がある信念が、社会によってどう扱われるかをよくわかっているからだ。つまり、自己モニタリング的な視点を持っているのである。

同時に、その求道的な信念に基づいて行動しているMisaoの活動戦略が、完全に目的志向的で、成熟した政治性を見せている事は併せ考える事が重要である。この両面性、すなわち私的領域に於ける信念と、公的な政治性が連続している事を理解することが、現在の反原発運動を理解する上で必要なことである。

### (2) Misao Redwolf のツイッターテキスト

以下ではそのMisaoがツイッターによってどのような情報発信と他者との交流を行なっているかを分析する。

対象にするのは、Misaoに依頼して貰い受けた、2009年12月12日から2013年5月27日までの全てのツイッターテキストである。27,587メッセージを含む。参考的な比較の対象として、反原発とは行動を共にしない団体の活動家Aのツイッターテキストを分析する。2013年1月23日から2013年6月23日までの2,456メッセージである。メッセージ数が十分の一なので対称的な比較にはならないが、理解の補助線として提示する。

形態素解析と作図にはフリーソフトウェアのKHCODERを使用した。分析の単位は、1 ツイートごとである。すなわちひとつのメッセージの中で単語同士がどういう関係にあるかを調べる。

## 3. 結果

### (1) 全テキストの共起ネットワーク分析

KHCODERを用いて、単語レベルでの共起ネットワーク分析を行い作図した(図1、図2)。この分析には、他者のツイートの転載であるリツイートも含んでいる。図1は、最小出現数450以上の単語の共起関係であり、図2は、最小出現数250以上の単語の共起関係である。共起関係は線で結ばれ、線が太いものは共起率が高い。配置された単語の相互の距離は、共起率とは関係がない。出現頻度が高い語は、大きな円で示してある。媒介中心性が高い単語は、領域Aと表示してある。媒介中心性とは、この場合、ある単語が他の単語をつなげている程度の高さによって中心的であることを意味している。

Misao Redwolfのネットワーク図(図1)では領域Aには「原発」がある。この「原発」の媒介中心性が最

も高く、言葉のネットワークの中心である。

領域Bでは左側に「東京」「日」「参加」「デモ」と日曜日に行なっているデモの告知があり、右側に「官邸」「大飯原発」「稼働」「抗議」が配置され、毎週金曜日の官邸前抗議の呼びかけがある。領域Cでは福島県いわき市に関する話題が多く、放射線に言及している。領域Dは、自分や他者に関する思索や洞察である。

つまりMisaoのテキストは、①デモと抗議の告知、②福島への配慮、③自己と思索と洞察の3つの世界によって構成されており、それらは比較的独立して併存している。

この図を別の団体の活動家Aのネットワーク図(図2)と比較してみよう。こちらの図には、「弾圧」と「拡散」の媒介中心性が高い(領域A)。領域Bは、参加者が逮捕されたことを政治的弾圧と位置づけて抗議していることと、領域C、Dには、自分たちの抗議活動が描かれている。ここには、図1にあったような思索、洞察の領域はない。他方で、Misaoの図1には、図2にある権力的な闘争は現れない。それは原発を止めるという一点に集中する(シングル・イシュー)という反原発の主張の現れである。

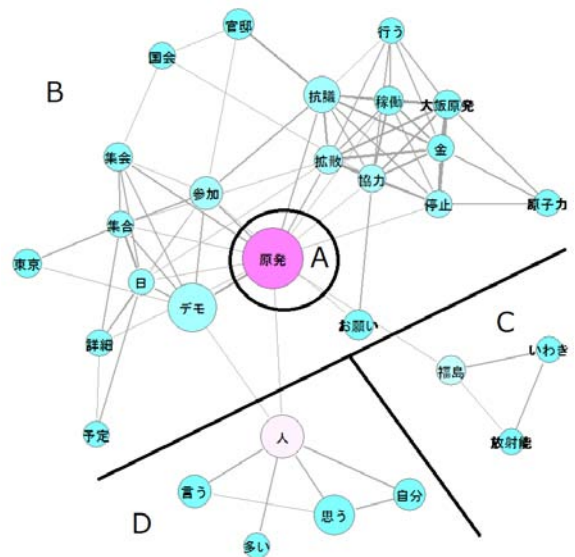


図1 Misao Redwolf 単語共起ネットワーク

<sup>3</sup> Misao Redwolf ウェブサイト

[http://misaoredwolf.com/j\\_profile.html](http://misaoredwolf.com/j_profile.html) 及びインタビュー (2012.9.4, 2013.5.27)。

## I-2 メディア・情報行動1 (心理・受容)

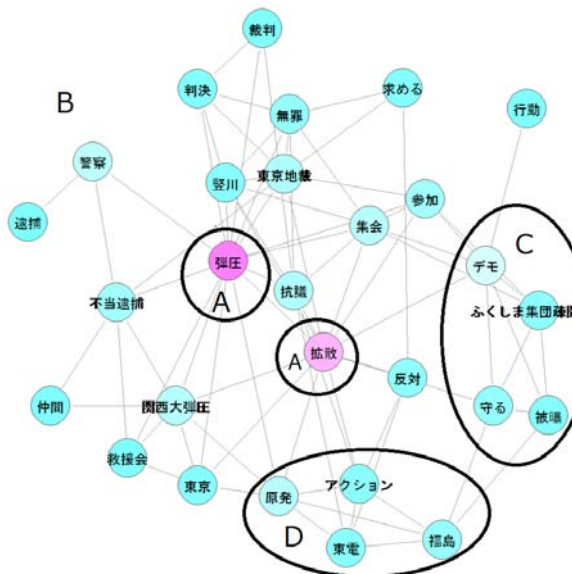


図 2 他団体の活動家A 単語共起ネットワーク

## (2) Misao の物語

それでは、思索の領域でMisaoが語っていることが何か、いくつかのツイートを抽出して考察しよう。自分への洞察を含むと予想される「自分」を含むツイートを抽出した。「自分」を含むツイートには、他者に貢献する事を使命と考えるメッセージや、克己的な、積極的なメッセージがある。

自分の仕事のキャリアでここまで真剣にやったことってなかった。暮らせればいいし名誉とか出世とか興味無かったし。やはり人間、自分自身の事より、他人や全体の事へのほうが一生懸命になれるんだと思う。(2013. 05. 20)

決意するタイミングが訪れることはあるけど、決意は自分が能動的にするものなんだよね。決意は踏みとどまることでもあり、決意せず流されることもあるだろう。決意や選択することを恐れていても、いつか巡り巡って更に大きな課題になって目の前にもどってくる。(2013. 4. 5)

しかし同時に、自らの苦悩、自分の人生への絶望も語られる。

参加者数は伸びないし多くないとは言え、沿道の反応も良く、どちらのブロックも雰囲気良かったように思うし、経費もなんとか赤字をまぬがれそうだし、だけど毎度の事ながらその日の夜は気分が落ちる。自分が不十分だったところばかり目につき感じるからだろう。(2012. 5. 20)

自分がこんな事言っではいけないのはわかっている

るけど。時折激しい孤独感に襲われる。  
(2013. 03. 17)

生存との闘い、政府との闘い、責任において早期解決したい数個の問題、自分はいったい何の為に生きているのかとふと思う時もある。まあ、死ぬまで生きろってことなんだろう。(2013. 3. 31)

現在進行中の運動の指導者が、自分の苦悩や弱さをそのままに書くことは、注目すべきことである。Misaoの物語は指導者の物語でありながら、Benfordの言う、「運動の物語」ではなく、むしろ「参加者の物語」である。

もう一つ指摘できることは、Misaoの図(図1)では、公的領域B、C(デモと福島)と私的領域Dが併存していて、「原発」によって接続されていることだ。図2では全てが公的領域にあり、Aの私的領域は、除外されている。

すなわち図1においては私的な生活(参加者の物語)と反原発抗議(運動の物語)という公的な領域が「原発」というキーワードによって接続されていることになる。自らの生活物語の延長線上に、反原発運動がある。

今日多くの運動参加者は、社会科学的理論やイデオロギーによってではなく、原発事故によってもたらされた自らの私的な生活での体験に基づいて抗議に参加している<sup>4</sup>。官邸前抗議参加者は次のように訴える。

私の故郷は放射能汚染により海も山も川も土地もすべて汚されました。あの日、地震と津波だけであったなら自分たちの力で再起できたのにもかかわらず、福島第一原発事故によって私たち住民の力ではどうすることもできなくなってしまった。  
(野間 2012:no page)

彼らは、自らの私的な生活の物語を集積して、抗議という公的領域に直結させている。Misaoの図はそのひな形を示しているといえよう。

## (3) 他者への発話(メンション)

次にMisaoがツイッターで他者に対してどのような発話をしているか、どんな言葉を多用しているかを調べた。ツイッターのメッセージでは、他者への発話(メンション)には@から始まるアカウント名がつくので、@と共に起する言葉を調べた。すなわち他者へのメンションの中で使われている言葉を調べた。ただしリツイートに含まれる@は除いてある。

反原発活動家Aのツイートには殆ど他者へのメンションがなく、分析不能だった。公平を期するために付記しておく、これはツイッターの利用方法の個性に

<sup>4</sup> インタビュー 一般参加者 T.R. 20代女性 2013. 4. 13。一般参加者 M.N. 30代男性 2013. 5. 12。



## I -2 メディア・情報行動1 (心理・受容)

過ぎず、活動家Aが他者とのコミュニケーションを軽視していると主張するのではない。Misao自身も、「最初は、主にデモ情報の発信に使おうと思った」と述べている<sup>5</sup>。

表 1 他者へのメンションで頻出した単語

| 順位 | 抽出語   | 品詞   | テキスト全体<br>中の出現数 | 共起し<br>た数 | Jaccard<br>係数 |
|----|-------|------|-----------------|-----------|---------------|
| 1  | ありがとう | 感動詞  | 828             | 752       | 0.1082        |
| 2  | 笑     | タグ   | 831             | 703       | 0.1004        |
| 3  | 思う    | 動詞   | 1726            | 699       | 0.0885        |
| 4  | お願い   | サ変名詞 | 688             | 441       | 0.0619        |
| 5  | デモ    | サ変名詞 | 1372            | 404       | 0.0515        |
| 6  | 人     | 名詞C  | 1447            | 406       | 0.0513        |
| 7  | 今日    | タグ   | 1338            | 346       | 0.044         |
| 8  | お疲れさま | 感動詞  | 342             | 291       | 0.042         |
| 9  | 言う    | 動詞   | 854             | 262       | 0.0351        |
| 10 | 今     | 副詞可能 | 716             | 218       | 0.0296        |

表1に示したように、Misaoのテキストで他者へのメンションに使われている言葉は、多い順に「ありがとう」、「笑」、「思う」、「お願い」、「デモ」、「人」、「今日」、「お疲れさま」、「言う」、「今」である。Misaoは、ツイッターを使って、お礼をいい、笑いかけ、お願いをするのである。このようなやり取りの中で、Misaoは参加者との関係を築いていく。

これらの単語は、ツイッターのやり取りでしばしば見かける言葉で、一般的な個人のツイッターの使い方であろう。むしろ、前述のAのように、殆ど他者へのメンションをしないという使い方のほうが特徴的といえる。組織の公式ツイッターのような使い方である。

前述のような苦境を伝えるMisaoのツイートにしばしば参加者から気遣いのメッセージが届く。それに対するMisaoの返答の一つが以下である。

ご心配おかけしてごめんなさい。周りの人たちの暮らしや健康状態に気をはせる余裕はまだあるので、大丈夫だと思います。それができなくなった時が休む時だと思ってます。(2013. 2. 2)

ここには物語交換または共同制作による繋がりが示されている。Davisの言う運動内での個人の関心の醸成や共同性が、このような物語交換の中で行われていく。

## 4. 考察と展望

### (1) 考察

我々は今、ウルリヒ・ベックの言う「危険社会」に生きている。原発事故はそのことを実感させるものであった。増大する危険と文明の危機に直面して、科学技術の合理性がもはや機能不全となっているので、「高等数学を駆使した統計や科学技術の装いがほどこされてはいるといっても、危険について述べる場合には、われわれはこう生きたい、という観点が入ってくるのである。(ベック 1998 : 90-92)」同様に、原発

に反対する抗議参加者の動機は、「われわれはこう生きたい」という「参加者の物語」にもとづいている。それは科学的合理性の外側にある。官邸前抗議参加者は、次のように語っている。

私たちが子供たちに手渡したいのは明るい未来、原発のない未来だ。私たちは死に方は選べないかもしれないが、生き方ぐらいは選びたい。(野間 2012:no page)

原発事故の後2年が過ぎたが、事故の収束の見込みも、被災者の救済のめども立っていない。日本の社会には、その爪あととは未だに深く残っている。また、個人を見れば、原発事故の後多くの人々は自分が急に当事者になったことに気づいた。個人も社会も、復興と未来について、未だ整った物語を紡ぐことが出来ない。

物語の型についてフランクは、病をめぐる物語には2つあるという。ひとつは「回復の物語」であり、もうひとつは、「混乱の物語」である。回復の物語のプロットには、次のような基本的な筋書きが存在する。「昨日私は健康であった。今日私は病気である。しかし明日には再び健康になるだろう」(フランク 2002: 114) ひとつとは、病はこのように語られるべきだというモデルを制度的物語から学習するのである(フランク 2002: 115)。しかし、ひとつとが経験する病は、明日回復可能なものばかりではない。

フランクの物語類型は、近代を支配する制度的物語(ドミナントストーリー)であるので、これを社会に当てはめることができるだろう。たとえば「福島事故は収束したので、原発を再稼働して経済を復興すべきだ」という「回復(復興)の物語」である。ところが、現実を見れば人々が今語りうるのは、破れた物語、「混乱の物語」である。

Misaoのテキストは、運動の中心人物にもかかわらずその物語が破れているところに、「回復の物語」ではないことに特徴がある。もっとも、物語が破れているだけならば珍しくはない。物語が破れたまま運動の物語に転化していることに特異性がある。

その事は参加者の共感を呼ぶだろう。何故ならば、反原発運動に参加する人々の物語も、また破れているからである。

息子は福島第一原発で収束作業に当たっている。私はいろんなものをあきらめた。だからあなた方も原発をあきらめて欲しい。(野間 2012:no page)

フランクは、傷が物語を可能にすると言っている。

病者、そしてすべての苦しむ者は、同時に癒す者となりうる。傷を負っているということが、彼らの物語の潜在的な力の源となる。その物語を通して、病者は自分たちとその聴き手との間に共感的な紐帯を作りだす。その紐帯は、物語が語り直されるたびに広がっていく。(フランク 2002:4)

<sup>5</sup> インタビュー 2013. 5. 27

## I -2 メディア・情報行動1 (心理・受容)

Misaoが傷ついた物語の語り手である事が、親密性と公共を繋いでいる。破れた私的な物語を、抗議活動という公共性につないでいる所に物語の力がある。また、インターネットのない時代には、運動の指導者と参加者が常時思いや意見を交換する回路は存在しなかった。語り手と聴き手を生み出し、聞き手による解釈共同体を成立させている所に、今日の社会運動におけるインターネットの役割がある。

### (2)課題

この発表では、社会運動における物語の位置と、そこに果たすインターネットの役割について考察した。取り上げた事例が二例のみであったので、今後の課題としてさらに多数による相互行為の分析をする必要があるだろう。さらに、Twitterなどインターネット利用は、言うまでもなくMisaoにとっても反原連にとっても対面世界での運動の一部であり、運動の戦略の一環である。運動全体の中でのインターネットの位置づけについて俯瞰する必要がある。同時に、Misaoならびに反原連は、どのように自己を表現するかについての繊細な再帰的自己モニタリングをおこなう集団であり、この特徴についても稿を改めて考察したい。

また、ここで見出したのは「物語による一致」であった。社会運動とインターネットが交錯する場で起きる、対となるべきもう一つの出来事は、「議論による不一致」である。現在、社会運動に直接関わる人々、そして関わらない人々が、社会運動について、生活範囲を超えて様々な議論を繰り広げている。このような空間を我々はこれまで持たなかった。しかも今起きていることは、90年代後半に希求された情報公共圏における討議倫理に基づく理性的議論とは大きく違い、一致に至らない事が前提の、論争テクニックの応酬、あるいは示威行為になっているように見える (Tamura 2013)。それは時にモラルハラスメントであり、あるいは、裁定者のいない空間で論争に勝ったようにみせることが、正当性の証明になる。これらのことが人々の意見形成にどのような役割を果たしているか、考察する必要があるだろう。

### 参考文献

- ベック, ウルリヒ (1998) : 『危険社会—新しい近代への道』, 東 廉 & 伊藤 美登里訳, 法政大学出版局.
- Costanza-Chock, S (2011) : “Digital popular communication: Lessons on information and communication technologies for social change from the immigrant rights movement,” *National Civic Review*, 100(3), 29–35.
- Davis, J. E. (ed) (2002) : *Stories of Change: Narrative and Social Movements*, State University of New York Press.
- Eltantawy, N., & Wiest, J. B (2011) : “Social media in the Egyptian revolution: reconsidering resource mobilization theory”, *International Journal of Communication*, 5, 1207–1224.
- フランク, A. W (2002): 『傷ついた物語の語り手: 身体・病い・倫理』 鈴木智之訳. 東京: ゆみ出版.
- 藤山清郷 (2012) : 圧政と失業そしてネットの情報力: 何が

- 「アラブの春」を生んだのか. 国際文化学部論集, 12(4), 295–313.
- 五野井郁夫 (2012): 『「デモ」とは何か: 変貌する直接民主主義』, NHK 出版.
- 伊藤 昌亮 (2012): 『デモのメディア論: 社会運動社会のゆくえ』, 筑摩書房.
- 野間 易通. (2012). 金曜官邸前抗議 ---デモの声が政治を変える. 河出書房新社.
- 小熊英二. (2013). 社会を変えるには〜官邸デモの現場から. 文藝春秋 2013 年 04 月号, 316–325.
- Tamura, Takanori (2013): "Who has the right to speak? The role of social media in spreading dissent among anti-nuclear groups in post 3-11Japan," presentation script at The 14th Annual Conference of the Association of Internet Researchers, October 23 - 26, 2013 in Denver, Colorado, USA.
- Tufekci, Z., & Wilson, C. (2012): “Social Media and the Decision to Participate in Political Protest: Observations From Tahrir Square”, *Journal of Communication*, 62(2), 363–379.
- Wilson, C., & Dunn, A. (2011): “Digital Media in the Egyptian Revolution: Descriptive Analysis from the Tahrir Datasets”, *International Journal of Communication*, 5, 1248–1272.